

## 作品の魅力

中島靖子(正派合奏団代表・正派音楽院院長)

長澤先生とは個人的に特に親しくお話しさせていただく機会はありませんでしたが、私が主宰する正派合奏団の指導を通じて、先生の作品の魅力に触れておりました。「飛騨によせる三つのバラード」は、正派音楽院の卒業生たちによる桐韻会の委嘱で作られ、桐韻会や合奏団のメンバーは、いただいたこの曲を心から喜び、楽しんで、これまで弾き続けております。今宵奏でられる音楽が、長澤先生のお耳にもとどきますように…。

## 長澤さんの歌曲

長廣比登志(元NHK音楽番組ディレクター)

月は東にすばるは西に…これは1968年にNHK委嘱作品として初放送されたく日本民俗詩より「恋の歌」>終曲の歌い出し。オペラ歌手でバリトンの故土川澄人と、昨年9月に他界した故日野てる子がデュエットした。彼女は60年代ハワイアン歌手として一世を風靡。さらに篠笛と数種の打楽器が、恋の息遣いを引立てる。民族の用と美のぬくもりにずっと心を寄せていた長澤さんの、珠玉の一曲となった。

## 長澤勝俊先生へ感謝

西潟昭子(三味線演奏家、洗足学園音楽大学教授)

長澤勝俊先生の作品を始めて演奏したのは日本音楽集団の定期演奏会「三味線協奏曲」でした。とても魅力的な曲でしたが大変苦労したのを覚えております。その後、箏・三絃・尺八の三曲合奏「コロポックルのうた」を作曲して頂きました。また現代邦楽研究所や洗足学園音楽大学での公演には必ず作品を演奏させていただいております。聴衆の心を捉える先生の作品はこれからも邦楽の楽しさ、面白さを人々に伝えていくことでしよう。

## あの頃、そして今…

野坂操寿(桐朋学園芸術短期大学教授)

「樹冠」のアンサンブルを聞いていた時のことです。中程の尺八のパートに、あたかも長澤さん御自身が歌われているような、優しく愁いに満ちた旋律を見付け、「ここ、いいわね!」と思わず言葉がもれました。若い頃には感じ取れなかった、心の奥に響く、美しい音が直筆のスコアーに書かれていました。長澤さんと対面している感覚でした。幸せな時間でした。

長澤節よ永遠に!!と願わずにいられません。

## 日本の伝統音楽への愛

野村祐子(正絃社二代家元)

日本の楽器には多くの種類があり、それぞれの音楽があります。長澤勝俊先生の作曲は、その個々の楽器の新鮮な魅力を引き出し、異なるジャンルを結び、また、演奏家集団も育てられました。諸外国の音楽への関心が高い傾向の我が国の音楽界の中で、長澤先生が日本の音色の美しさを広められ、日本の伝統音楽へ注がれた深い愛情を、私たちは決して忘れず、残された財産である作品とともに日本の伝統音楽を守り続けたいと願っています。

## 曲は人なり

羽田野歌子(NHKチーフディレクター)

長澤先生には、作曲や収録立会い、邦楽オーデションなどで大変お世話になりました。若輩者の私の勝手な注文にも、嫌な顔ひとつなさらずにお付き合いいただきました。今、考えると大家の先生に、なんて失礼なことを申し上げたのだろうと赤面しております。先日、「邦楽百番」で長澤先生の作品を特集して、改めて先生の音楽の多彩さを痛感いたしました。長澤作品は、これからも多くの人たちに愛される「古典曲」になると確信しています。

## 思い出

半田淳子(半田琵琶「華絃会」主宰)

1974年、東南アジア4ヶ国公演の時の事、バリ島の海で泳いだり、無邪気にロブスターを頬張っていらした先生の様子を懐かしく思い出します。シンガポールでは、高層ビルの最上階のレストランで、お食事を一緒にした時、「戦時中、僕たちがこの辺の道路整備をやったんだよ」と、おっしゃって、窓の外をじっと眺めていらした時の先生の表情を、忘れる事が出来ません。あのやさしい暖かい音楽の原点は、このあたりにあったのでしょうか。

## 故長澤勝俊先生に感謝

一つ柳竹山(社団法人日本尺八連盟)

社団法人日本尺八連盟の理事、そして各種の審査委員をお引き受け戴いていました故長澤勝俊先生に、当、日本尺八連盟も「海のしらべ」「淡墨桜讃」「宵宮から本宮へ」「春のいぶき」などの尺八曲を作曲して頂きました。長澤先生の音楽は、日本人の豊かな心情と日本の深い伝統を想起させ、その音の流れやハーモニーは、聞く人の感性にうたえ感動させ、私達の心に永遠に生きつづけます。長澤勝俊先生、有り難うございました。

## 温かいひとときに

藤間文彦(株式会社おもだか代表取締役)

長澤先生には、スーパー歌舞伎「ヤマトタケル」の音楽をご担当されたときにお目にかかりました。二十数年前のことです。一切妥協しない頑ななまでの演出家のもと、各パートの先生方のご尽力なくしては到底なし得ない作品づくりでした。その後の「オグリ」「八犬伝」「カグヤ」もご担当いただきお力を尽くして下さったこと、心より感謝しております。本日は、先生とその作品に思いを馳せる温かいひとときとなりますよう、お祈り致します。

## 長澤先生の眼差し

藤本草(財団法人日本伝統文化振興財団理事長)

「現代に生きる子供をふくめた多くの人々と共に新しい音楽について考えていきたいというのが、私の希いでした」—「子どものための組曲」CD曲目解説に長澤先生はこう書かれています。日本音楽集団第一回演奏会で発表された記念すべき作品のこの銜いのないタイトルに、音楽を通じて何をすべきか、柔和な眼差しの裡に厳しい信念を持たれていた長澤先生の、すべての年代の人々へのメッセージが込められていたのだと思います。

## あの懐かしい20年!

三木稔(作曲家)

あれは長澤さんの40、50代、コンテンツいっぱいの20年間でした。誘った私には、長澤さんの道を曲げてしまったのではないかと、今も悩むことがあります。でも、大変だったけど、沢山の俊秀と過ごして創造した、おそらく歴史に類のない日々を持ちえた我々は幸せでしたね。08年も秋、集団打楽器の華、白杵美智代さんのサヌカイト・リサイタルのために書く機会を借り、長澤さんの作風を思いつつ、あの20年に捧げる小曲を書きました。

